

# 蘆刈

禪竹作

季は	地は	ワキ
春	摂津	妻の従者
	シテ	狂言

ツレ	左衛門の妻	里人
	日下左衛門	

「古き都の道なれや。く。難波の浦を尋ねん。

詞 「かやうに候ふ者は。都さる御方に仕へ申す者にて

候。又是に御座候ふ御事は。頼み奉り候ふ人の  
若子の御乳の人にて御座候。御里は津の国日下の  
里にて候ふが。今一度御下りありたき由仰せ候ふ  
程に。此度我等御供申し。淀より舟にのせ申し。  
唯今難波の浦へと急ぎ候。

道行

「淀舟や。水野の原の曙に。く。影も残りて有明

の。山本かすむ水無瀬川。渚の森をよそに見て。  
なほ行末は渡辺や。大江の岸もうつり行く。浪も  
入江の里つゞく。難波の浦に着きにけり。く。

ワキ詞

「御急ぎ候ふ程に。是は、や津の国日下の里に御着  
きにて候。是に暫く御待ち候へ。日下の左衛門殿  
を尋ね申さうするにて候。此あたりの人の渡り候  
ふか。

狂言

「誰にて渡り候ふぞ。

ワキ

「此あたりに日下の左衛門殿と申す人の渡り候ふか。

狂言

「もとは此所に御座候ひしが。散々御無力にて今は此所には御座なく候。

ワキ

「あら何ともなや候。此由をやがて申さうするにて候。如何に申し候。左衛門殿を尋ね申して候へば。

今は此所には御座なき由申し候。

ツレ女サシ

「げにや家貧にしては親知すべなく。賤しき身には

故人うとしとかや申すなれば。身には限らぬ習ひなれども。余りにあさましき有様かな。去りながら様々ちぎり置きし事有り。此所に暫く逗留し。他人の行方を尋ねばやと思ひ候。

ワキ

「げにく仰せ尤にて候。此所に暫く御逗留候へ。

猶々御行方を委しく尋ね申さうするにて候。いかに以前の人の渡り候ふか。此浦に如何なる面白き事は候はぬか。都の人見せ申したく候ふよ。

「さん候この浦に浜市の候。色々の物を売り買ひ候ふ中に。若き男の此難波の蘆を刈りて売り候ふが。色々に戯れごとを申して面白き者にて候ふ間。名

草の事にて候ふ程に皆々買ひ取り候。暫く御待ち候ひて彼者を御覧候へ。

ワキ 「あらうれしや候。さらば彼者を待つて見うずるにて候。

「足引の山こそ霞め難波江に。向ふは波の淡路潟。

シテサシ  
「足引の山こそ霞め難波江に。向ふは波の淡路潟。  
げにや所から異浦々の氣色までも。ながめにつゞく  
難波舟の。出で浮びたる朝ぼらけ。心も澄める面  
白さよ。

一聲 「難波なる。見つとはいはじかゝる身に。

地 「我だに知らぬ面わすれ。

シテ 「立ち舞ふ市の中々に。

地 「隠れどころはある物を。

シテサシ 「げに受けがたき人界を。たま／＼受くる身なりせ

ば。栄花の家には住みもせで。かゝる貧家に生るゝ事。前の世の戒行こそ拙けれ。今とても為す業もなき身の行方。昨日と過ぎ今日と暮れ。明日又かくこそ荒磯海の。浜の真砂の数ならぬ。此身命をつがんとて。あだなる露の草の葉に。蘆刈人と為りたるなり。

下歌  
「何とかならん難波江の。浦に出で里に雪の。寒き日をも厭はず。

上歌  
「しほたるゝ。我身のかたはつれなくて。く。異浦見れば夕煙。うらめしや終に身を。立てかねてこそ賤しけれ。蘆田鶴の。雲井のよそに詠めこし。月の下蘆刈り持ちて。露をも運ぶ袖の上。猶ありがほの心かな。く。

ワキ詞  
「いかに是なる人に申すべき事の候。

シテ詞  
「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ  
「見申せば色々の物を売り候ふ中に。難波の蘆を御

売り候ふ事やさしうこそ候へ。

シテ「さん候此あたりにては売る者も買ふ人も。唯何となくあつかふ所に。都の人とて難波の蘆を御賞翫こそ。返すべくもやさしけれ。我も昔は難波津の名におふ古き都人の。縁の露のおちぶれたる。身は枯蘆の色なくとも。よしとて召され候へ。

ワキ「あら面白や候。さてよしと蘆とは同じ草にて候ふか。

シテ「さん候譬へば薄ともいひ。穂に出でぬれば尾花ともいへるが如し。

ワキ「さては物の名も所によりて変はるよなふ。

シテ詞「中々の事此蘆を。伊勢人は浜荻といひ。

ワキ「難波人は。

シテ「蘆と云ふ。

詞「むつかしや。難波の浦のよしあしも。く。賤しき海士はえぞ知らぬ。唯世をわたる為めなれば。

仮の命つがんとて。蘆を取り運びて。此市にいづる蘆數に。おあし添へて召されよや。おあし添へて召されよ。露ながら。難波の蘆を刈り持ちて。よるは月をも運ぶなりや。暇をし夕汐の。昼の内に召されよや。昼の内に召されよ。

ワキ詞

「如何に申し候。さて御津の浜とは何くにて候ふぞ。

シテ「忝くも御津の浜の御在所はあれにて候。

ワキ「不思議やな何とて忝きなどゝは仰せ候ふぞ。

シテ「あら何ともなや。さらば何とて御津の浜とは御尋ね候ふぞ。忝くも仁徳天皇。此難波の浦に大宮づくりし給ふ。御津と書いて御津の浜とは申すなり。「げに面白き謂かな。皇居なりつる浦なれば。御津の浜とは理なり。

シテ「波濤海辺の大宮なれば。漁村に灯す篝火までも。禁裏雲井の御火かと見えて。上雲上の月卿より。下万民の民間までも。有難かりし恵ぞかし。や。

あれ御覧ぜよ御津の浜に。網子とゝのふる網船の。  
えいやくと寄せ来るぞや。

地 「名にし負ふ難波津の。く。歌にも大宮の。内まで聞ゆ網引すと。網子とゝのふる。海士の呼声とよみおける。古歌をも引く網の。目の前に見えたる有様。あれ御覧ぜよや人々。

シテ 「面白や心あらん。

地 「面白や心あらん。人に見せばや津の国の。難波わ

たりの春のけしき。おぼろ舟こがれ来る。沖の鷗磯千鳥。つれだちて友よぶや。海士の小舟なるらん。

シテ 「雨に着る。

地 「雨に着る。田蓑の島もあるなれば。露も真管の。笠はなどか無からん。

ロング地 「難波津の春なれや。

シテ 「名におふ梅の花笠。

地 「縫ふてふ鳥の翼には。

シテ 「鶲も有明の。

地 「月の笠に袖さすは。

シテ 「天つ乙女の絹笠。

地 「それは乙女。

シテ 「是はまた。

地 「難波女の。く。かづく袖笠ひぢ笠の。雨の蘆辺  
も乱るゝかたを波。あなたへざらり。こなたへざ  
らり。ざらりくざらくざつと。風のあげたる  
古簾。つれぐもなき心おもしろや。

ツレ詞 「いかに誰がある。

ワキ詞 「御前に候。

ツレ 「あの蘆売る人に。其蘆一本持ちて来れと申し候へ。

ワキ 「畏つて候。いかに申し候。あのお輿の内へ。其蘆

一本持ちて御参りあれと仰せ候。

シテ 「畏つて候。さらば此蘆を参らせられ候へ。

ワキ

「いや唯直に参らせ候へ。あら不思議や。今の蘆売る男の。御姿を見参らせ。是なる所へ隠れて候ふは。何と申したる御事にて候ふぞ。

ツレ「今は何をか包み参らせ候ふべき。唯今の蘆売る人は。わらはが古人にて候。是は夢かやあらあさましや候。

ワキ「言語道断の御事。更に苦しからぬ事にて候。某やがて参り御供申し候ふべし。御心やすく思し召され候へ。

ツレ「いや暫く。皆々御出であらば。定めて恥ぢ参らせられ候ふべし。わらはひそかに行き。斯くと申さばやと思ひ候。

ワキ「げに是は尤にて候。さらば御出であらうするにて候。

ツレ「如何にいにしへ人。わらはこそ是まで参りて候へ。行末かけし玉の緒の。むすぶ契りのかひありて。

今は世にある様なれば。はるぐ尋ね参りたるに。  
何くへ忍ばせ給ふらん。とくとく出でさせ給ひ候  
へ。

シテ「是は唯夢にぞあるらん現ならば。よその人目も如  
何ならんと。思ひ沈めるばかりなり。

ツレ「かくは思へど若は又。人の心は白露の。起き別れ  
にしきぬぐの。妻や重ねし難波人。

シテ「蘆火たく屋は煤垂れて。おのが妻衣それならで。

又は誰にか馴衣。君なくて悪しかりけりと思ふに  
ぞ。いとゞ難波の浦は住みうき。

ツレ「あしからじよからんとてぞ別れにし。何か難波の  
浦は住みうき。

シテ「げにや難波津浅香山の。道は夫婦の媒なれば。

地「さのみは何をか包井の。隠れて住める小屋の戸を。  
押しあけて出でながら。面なのわが姿や。三年の  
過ぎしは夢なれや。現にあふの松原かや。木陰に

円居して。難波の昔かたらん。

ワキ詞

「かゝるめでたき御事こそ候はね。やがて都へ御供あらうずるにて候。先々鳥帽子直垂をめされ候へ。

地クリ

「夫れ高き山深き海。妹背恋路の跡ながら。ことに難波の海山の。所からなる情とかや。

シテサシ

「あるは男山の昔を思ひいでゝ。

地  
「女郎花の一時をくねると云へども。いひ慰むる言の葉の。露もたわゝに秋萩の。本の契の消えかへ

22

り。つれなかりける命かな。

シテ

「さればかほどに衰へて。

地

「身を羽束師の森なれども。言葉の花こそ便なれ。

クセ

「難波津に。さくやこの花冬ごもり。今は春べと咲くや。この花と榮え給ひける。仁徳天皇と。聞えさせ給ひしは。難波の御子の御事。又浅香山の言の葉は。采女の盃とりあへぬ。恨みをのべし故とかや。此二歌は今までの。歌の父母なる故に。代々

23

にあまねき花色の。言の葉草の種とりて。我等如きの。手習ふ初めなるべし。然れば目に見えぬ。鬼神をもやはらげ。武士の心なぐさむる。夫婦の情知る事も。今身の上に知られたり。

シテ「津の国。難波の春は夢なれや。

地「蘆の枯葉に風渡る。波の立居のひまとても。浅かるべしやわたづみの。浜の真砂はよみ尽くし。尽くすとも。此道は尽きせめや。唯もてあそべ名に

しおふ。何はの恨みうち忘れて。有りし契りに帰りあふ。縁こそ嬉しかりけれ。

ワキ詞「いかに申し候。めでたう一さし御舞ひ候へ。

シテ「さらばそと舞はうずるにて候。今は恨みも波の上。「立ちまふ袖のかざしかな。(男舞)

地「浮寐忘るゝ難波江の。く。蘆の若葉を越ゆる白浪。月も残り。花も盛に津の国。小屋の住居の冬ごもり。今は春べと都の空に。伴なひ行くや大

伴の。御津の浦わの見つゝを契りに。帰る事こそ  
嬉しけれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈第七輯」大和田建樹著